各地本だより

関西地本

暑さ寒さも彼岸までといわれるが、関西圏では奈良県の東大寺二月堂の「お水取り」の終了を以て春を迎える。ここ数日来、一雨ごとに気温が緩み、テレビ、新聞では桜の開花が報じられ、春の訪れが告げられる季節の移ろいの早さに驚いているが、関西圏での景気の春風はいつ吹くのか鶴首する此頃である。

そうした中、大手メーカーによる春闘の一斉回答が行われた。アベノミクス効果で企業の業績回復傾向が示されるのに加えて、安倍首相の賃上げ発言も後押し業種別での差が出たものの、定期昇給、一時金では満額に近い回答が相次ぎ、景気回復、デフレ脱却に向けて期待が持てる内容となった。しかし、わが国では大多数である中小零細企業に働く労働者や、非正規労働者を含めた総ての労働者に賃金の改善が反映されてこそ、デフレ脱却の足掛かりといえよう。

さて、関西の労供概況ですが、年明けより未だ底が見えずという現状が続いている。生コン会社の統廃合は止まらず、供給先事業所の倒産、廃業が三社と相次ぎ、厳しい就労状況が続く中、高齢組合員を始め生活困難に陥る組合員の脱退が増加している。厳しい局面を打開すべく、二月に三社と新規協約を締結し、加えて他府県において新規事業所との協約締結に向け現在交渉中である。

何はともあれ供給能力の維持と対応体制の強化が急務となっており、組織拡大、組合員の絶対数の確保に向け現在募集中である。しかし、同業他社も含め求人募集が昨年を大きく上回り、思うように補充が出きていない情況が続いている。それだけに今が踏ん張り所と捉え、白土委員長のもと、執行部一丸となって魅力ある組織の再構築、労供機能の強化、雇用の確保に取り組み、この難局を乗り越えて行く決意である。

書記長　井口隆志

埼玉地本

事務所周りの桜も綺麗に咲き揃い、いよいよ本格的に春を実感できるようになってきました。三寒四温とは言いますが、真冬の寒さかと思えば初夏のような陽気になるなど、このところの寒暖の差には驚かされます。体調を崩さぬよう体調管理には留意され日々就労にあたってください。

さて、2013春闘も大企業から中小へと移ってきておりますが、アベノミクスによる円安、株高により企業業績のアップした分野には明るい回答も出ているようですが、全体を見回すとまだまだ厳しい状態であるのかなと感じます。特に正社員等の待遇は好転してきているようですが、非正規労働者にあっては全くその兆しすら見えていないというのが実情ではないでしょうか。

私たち埼玉においては七月の協約改定にあたり、今年こそ賃金や労働条件の向上を目標に頑張って参りたいと考えております。

最後に労供概況ですが、年度末という事もあってか、このところ供給しきれない日々が続いております。新規組合員も若年層を中心に加入してきており、少しずつではありますが需要過多の状態も解消に向かっており、引き続き加入促進に力を入れ組織拡大を図っていきたいと考えております。

しかしながら、新年度より清掃関係に縮小の動きがでたり、生コンの事業所の統廃合も依然として続いていることから、基盤である生コンの動きには注意しながらも、やはり業種拡大を図っていく必要があるだろうと思っております。

委員長　折井洋之

東京地本

東京はいつになく寒かった冬に突然春が押し入ってきた感じで桜が満開、あれよあれよという間に早くも桜吹雪が舞っています。先日は、上野職安に印紙購入手帳の更新手続きに行った帰りに上野公園を覗いたところ、平日の午後というのに信じられないほどの人手が繰り出していました。

連合・交運労協の春闘も大手を中心に満額回答とか昨年を上回る回答とか威勢の良い報告が相次ぎ、自分の懐具合や労供現場との格差に思わず手を見るという感じです。それにしても安倍政権になった途端の円安・株高という浮ついた変化は、何処かで大きな共同謀議と金融操作がなされていて、この先に大きな落とし穴が待っているとの不信感が募るばかりです。その節目・分水嶺が7月の参議院選挙で、このままの大衆洗脳が続けば昨年衆議員選挙並みの保守反動勢力の勝利になりかねないと思うのは私だけはないでしょう。

ところで気がつけば年度末を迎え、各支部では恒例の清掃作業員募集に追われています。それも3月になってから10人、20人の供給依頼が来るという状況に対応すべく、今回は四支部まとめて大きな募集広告を出しました。その結果、応募者が殺到、支部役員は面接、供給先への紹介、手帳作成等の大変な雑務をクリヤーしたようです。

そうした中で、継続就労組合員の法的位置づけで、一般の労働者と労供組合員の違いが行政内部で問題となっています。昨年の日雇い派遣の原則禁止の適用において関西のニューロードが不当な禁止措置を受けたのですが、今回は東京のタブレットのクーリング期間における組合員の就労を派遣先企業の「直雇用」に切り替えたと認定したのです。まさに、供給契約を無視した行政判断ということで、異議申し立てをすることになっています。それだけに労供事業法の必要性を切実に感じるこの頃です。

書記長　太田武二

滋賀地本

東京の多摩川や上野は連日のニュースでサクラが満開と報道されていますが、滋賀県ではまだ先のようです。しかし、3月9日には琵琶湖に春の訪れを告げ、海上の安全、環境保全を祈願する恒例の「びわ湖開き」が観光船ミシガンの艦上で行われるなど、春らしい行事が続いています。

ところで、日本列島はアベノミクスに期待する報道が少々過熱気味?円安、株高の恩恵を享受しているのは大企業や投資家など一部であり、われわれ庶民は消費税の引き上げ、電気代やガス代など生活を直撃する物価高騰の予感にびくびくものです。

この様な政治、経済の状況のなか、われわれの労供を取り巻く環境は一向に改善される様子も無く、日々厳しい就労状況となっています。今年も6月には新運転の全国大会が開かれる予定ですが、組織体制、労供の有り方、賃金、労働条件など多くの改善しなければならない課題があると思っています。特に経済状況や労働環境の変化は新運転発足当時とは全く違って、インターネットなど情報インフラは飛躍的に発達し、数時間要した情報伝達は今や一瞬にして世界に伝達する事が可能な時代です。組織拡大イコール労供の拡大は若年世代に如何に魅力的な労供先を確保出来るか。また高齢者には低賃金でも働き甲斐のある仕事場を提供できるか。など実現可能な議論なり意見交換が出来る大会になることを期待したいと思います。

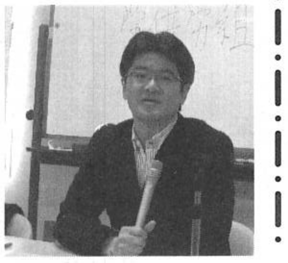
さて、滋賀地本の労供現況は相変わらずの低空飛行で不安定な状況で推移し、このままでは何時失速してもおかしくないと危惧しています。

書記長　田中　浩

労供労組協

第30回総会開催！

去る3月6日、タブレット根岸会館5階会議室で、午後1時半より第30回という区切りの良い総会が開かれた。冒頭、挨拶に立った伊藤議長は「昨年来、労働法制の改革が相次ぐ中で、我々の労供事業は、一種の成長産業といってもいいほど新たな組合が取り組み始めています。また、昨年の取り組みで、日雇い雇用保険と特例健康保険の改善を求める署名については、提出したままになっているのですが、行政の姿勢は逆に廃止に向かっているという話も伝わってきます。政権が変わって厳しい労働情勢が想定される中、労働者供給事業の重要性を社会に訴え労供事業法の具体化に向けて更に議論を深めていきましょう」と挨拶、経過報告と活動方針、会計と予算などの議事に移った。



若干の質疑応答で承認された後、新役員が提案され、新事務局次長2名と伊藤議長、太田副議長、横山事務局長ほか再任役員が提案され、拍手で承認された。

議事の終了後、水町勇一郎東大教授の記念講演に移った。テーマは「労働市場政策の展望と労働者供給事業の可能性」。内容は、労働市場の法規制、とりわけ労働者供給事業の禁止の歴史的経過と必要性を分析し、雇用仲介事業（職業紹介・労働者派遣事業）の法規制の必然性と労働者供給事業の可能性と課題に触れた。

結論の一つは、労働組合の労供事業は、労働者、事業者、引いては労働市場の三者の共同利益となるというもので、30回記念講演に相応しいものだった。

隠居の海外旅行

～どこか懐かしい国・台湾～

（その一）

河合　明博（元新産別委員長）

△欲張り観光地巡り▽

台湾は、10年ほど前に訪れたことはあるが、それだけではなく、何とも馴染みやすく、懐かしい感じを与えてくれる国である。1945年まで日本の統治下にあって、古い日本的なものが有形無形に残っているということもあるだろう。台湾総督府の現地政策が宥和的だったという見方もある。だが、私は台湾人の人間性によるところが大きいと思っている。そして、それは自然と風土がもたらしたものであるに違いない。

言われるように確かに親日的である。民族的に近いことは間違いなさそうだが、それならば、中国だってもっと親近感を覚える筈だが、中国とはかなり雰囲気的に違うのである。警戒感を持たないで旅行できるというのは何とも有り難い。

今回訪れたのは、台北、台中、嘉義、台南、高雄、台東、花蓮、基隆、九份と、台湾をほぼ一周である。「よくばり台湾一周スペシャル6日間」というツアー名そのままである。北回帰線も、北から南、南から北、と二度またいだ。

ほとんどがバスでの移動。道路は良く整備されている。東海岸の花蓮から台北までは在来線特急「かもめ」だった、台中からは有名な観光地「日月潭」、高雄では龍と虎がシンボルの「蓮池潭」、台東では、「三仙台」「八仙洞」、古都台南では鄭成功ゆかりの「赤嵌楼」等々名だたる観光地へ。花蓮近郊の世界的に有名な「太魯閣峡谷」は、日本のそれとは全くスケールが違う名勝地。二百万年前に海中で形成された大理石の峡谷が隆起したものといい、崩れ易い絶壁の間をクネクネと進み、迫力満点。バスの中から見上げる絶壁は天を衝く。花蓮では、原住民・阿美族の民族舞踊も見もの。短い期間で、見所満載だから思い出を整理するのに難儀する。

赤嵌楼

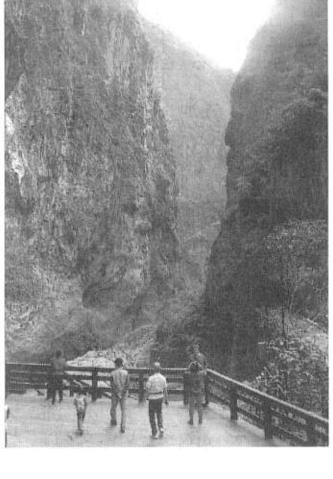
△間違いなく親日的▽

尖閣問題以降、中国の反日は良く知られているが、意図的な歴史教育で吹き込まれ、真実も知らぬまま、「小日本」などと叫ぶ中国の若者は、私の理解を越えている。いずれ彼等も理性に目覚める時が来るものと期待しているが・・・・。

そういうものとの対比ではなく、台湾人の親日は肌で感じる。台北市内を走るMRTの車内。目の前の席が空いて、二人で譲り合っていたら、『ジャンケンで決めたら』と年配のご婦人から声が掛かった。その席は優先席らしく、いささか気が引けたので、七十八歳だと弁解がましく言ったところ、そのご婦人の連れ合いの紳士から『それじゃ昭和9年生まれでしょ、私と同じ年だ』と綺麗な日本語で親しげに言われた。戦前日本語で育った世代だが、ごく自然にそういう接し方ができる。すぐ次の駅で降りられたので、それ以上の会話に発展しなかったのが残念だ。それを見ていた回りも特別のものを見ている感じでは全くなかった。ごく自然なのである。全体として、成熟した先進国という雰囲気である。土産物店で、リャンガ（二つ下さいの意）と言ったら、「北京語お上手ですね」といわれた。お世辞と分かっていても悪い気はしない。

一昨年の三・一一東日本大震災に際して、他のどの国よりも多額の百七十億円という義捐金を、いち早く贈られたことは、我々の記憶にも新しい。

（続く）



太魯閣峡谷